
S.M.T.クエスト

現地 晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S・M・T・クエスト

【Nコード】

N6928X

【作者名】

現地 晶

【あらすじ】

かつて、伝説の勇者によって倒された筈の魔王が復活した！
国王からご先祖様の尻拭いを命じられた勇者の子孫ミイナは仕方なく旅に出る。

回復魔法しか使えない神官、病弱魔法使い、不運な戦士、よく分からない職業の者……。

レベルは高いがいろいろと問題がある勇者の子孫達は、ご先祖様の遺物を頼りに無事魔王を倒せるか！？

ごく都合主義なギャグ話です。残酷描写、流血描写、ブラックな表現が苦手な方は回避をお願いします。

魔法・技・称号一覧（ネタバレ含む）（前書き）

小説本文を読んでいないとネタバレになりますのでご注意ください。

● 称号について……一部を除き、本文で出す予定はありません。お遊びとして捉えてください。

小説が進むにつれ、一覧は増えていきます。

魔法・技・称号一覧（ネタバレ含む）

（魔法）

<神官ミイナ>

・回復系・

カンチ……………小回復。軽い怪我ならこれで大丈夫。
カンチダ……………中回復。大量吐血も治します。
カンチシロ……………大回復。瀕死もお任せあれ。
???……………究極回復。回復とは気合いだ！

<魔法使いレイ>

・攻撃系・

ライウ……………雷を伴う激しい雨が降り注ぐ。
キョウカ……………強火。焚き木に点火する時や中華料理を作る時に大活躍。

ツララ……………氷柱が敵に突き刺さる。

モウカ……………大きな炎で敵を焼く

カエンチュウ……………巨大な炎の柱がドーン！

モウウ……………猛烈な雨が降る

・補助系・

???

???

・移動系・

ビュン……遠い場所でも一瞬で移動できる便利な呪文。多少の制約あり。

・特殊系・

???

???

〕技〕

<戦士ガイン>

メッタ刺し……敵が倒れるまで刺し続ける。その間、攻撃されても防御は一切出来ない。

<チャンピオン・シータ>

大食い……周囲がドン引きするほど食べる。
大回転……すべてを薙ぎ倒しながら転がる、巨体ならではの技。

く称号く

伝説の勇者の子孫……伝説の勇者の子孫。全キャラ初期装備。
とばつちり神官……ご先祖様のせいで酷い目にあってしまいました。ミイナ専用。

病弱魔法使い……「魔法は体に負担がかかるんだ」だったら魔法使いにならなきゃ良かったのでは？レイ専用。

国一番……国一番の実力者です。

暴走娘……街中でもお構い無しに馬車を暴走させる娘。ミイナ専用。

犯罪者……悪事に手を染めました。

呪われ戦士……うっかり呪われた、不運な戦士。ガイン専用。
チャンピオン……彼はチャンピオンです。シート専用。

緑の巨大饅頭……『ずんだ』っぽい緑色の巨大饅頭。シート専用。

貧乏パーティー……お金、稼がないとね。

料理上手……美味しい食事は心を豊かにするのです（ミイナ談）。
シート専用。

おんぶ男……得意技、おんぶ。おんぶしたまま戦闘可能。ガイ
ン専用。

おぶわれ男……得意技、背負われる。背負われたまま戦闘可能。
レイ専用。

十割バッター……投げられた球はすべて打ち返す、脅威のバッター。
ミイナ専用。

燃える男……引火しました。

1 たぶん魔王復活（前書き）

この作品は、流血描写が多めです。

また、残酷描写、ブラックな表現、相手に対して敬意の感じられない発言等もあります。

それらに少しでも嫌悪を抱かれる方は、回避をお願いいたします。

1 たぶん魔王復活

かつて、世界を恐怖に陥れた『魔王』。

その魔王が勇者に倒されてから長い年月が経ち——今、世界は再び暗黒に覆われつつあった。

「というわけで、伝説の勇者の子孫、神官ミイナよ。復活した魔王を退治しに行くがよい」

世界の東に位置する『神職者の国セイン』。その城の一室で、王は神官ミイナに命じた。

「王様、そうあっさり言われても……」

ミイナが唇を尖らせて、椅子にどっかりと座っている王を見つめる。

ミイナは背中まである金色に近い明るい茶色の髪と、少し幼い顔立ちが特徴的な十六歳の女の子である。そして、かつて魔王を倒した伝説の勇者の子孫でもあった。

「いいから行くがよい」

王がしつしと手を振る。

「無理です、王様」

「そもそも伝説の勇者がしっかりと倒していなかったから、魔王が復活したのじゃろう？ 先祖の尻拭いは子孫の役目じゃ」

「そんな無茶苦茶な……」

ミイナは愛用の杖を握りしめて唸る。別に勇者の子孫に生まれたかったわけでもないし、それで今まで何か得をした覚えも無い。そ

れなのにどうしてこんな時だけ、ご先祖様の話が出てくるのだ。

「兵を退治に向わせるというのはどうでしょうか？」

王が首を横に振る。

「兵は国と余を守るので手一杯、それに平和な時代が続いていたから、はつきり言って驚くほど弱いのだ。そんなことはミイナも知っておるじやろう」

知ってはいるが、だからといって『じゃあ行ってきました』とはミイナも言えない。何故なら――。

「私、回復魔法しか使えないのですが。剣も使えないですし、これでどうやって戦えと……？」

「余など、王であるのに魔法も剣も扱えんぞ。昔と違い、現代では魔法を使える人間なんて、世界中にほんの一握りしかおらん。その中で最上級回復魔法が使えるだけミイナは立派じゃ」

ミイナが「うつ」と言葉に詰まる。

「いや、でも……、それに第一、魔王って本当に復活しているんですか？ 誰かが確認したわけでもないですし……」

王は眉を寄せ、窓の外を見た。

「まがまがしい気配を感じるじやろう？」

「まあ、微かには」

「黒い雲がちらほらあるし、空気も淀んでおる。魔物の活動も活発になっておるから、たぶん復活したのじやろう」

「たぶんって……」

肩を落とすミイナに、王は視線を戻した。

「しかしまだ、復活したばかりで力は弱い筈じゃ。今のうちにサクッとやってくるがよい」

「サクツって言われても、だからどうやってですか」

「隣国にも勇者の子孫がおるじやろ？ 世界には他にも勇者の子孫がおる筈じゃ。その中にはきつと強い者もある。集めて魔王の元に行くがよい」

「『筈』とか『きつと』とか『たぶん』とか、そんなのばかりじゃ

ないですか！」

「余も怒りたい。なんでよりによって余の時代に復活などするのじや」

王は椅子から立ち上がると、ドアへと向かった。

「ほらミイナ、こちらに來い」

「もう！ 王様！」

廊下に出て行った王を、ミイナは仕方なく追う。王は「こっちじや、こっち」と言いながら、城の外へとミイナを連れて行った。そして――。

「ほら、立派じゃろう？」

王が庭に置いてある、一頭立ての幌馬車を指差す。

「この馬車をやろう。着替えなどの荷物も積み込んである。さあ、急がないと魔王が力を取り戻してしまうぞ」

こんなものまでも用意していたのかと、ミイナが驚く。あくまで王は、ミイナを魔王退治に行かせる気なのか。

「でも王様、やっぱり無理で――」

「皆の者ー！ 伝説の勇者の子孫、ミイナが魔王退治の旅に出るぞ！ 盛大に見送るがよい！」

突然、王が叫んだ。

「王様！ 何するんですか！」

ミイナが慌てて王の口を手で塞いだが、遅かった。近くに居た人々が集まり、騒めき始める。

「魔王退治？」

「ミイナが？」

「おお！ 何という勇氣！ さすが伝説の勇者の子孫！」

焦るミイナをよそに、人々からワツと拍手が起こった。

「頑張れ！」

「頑張れミイナ！」

「応援しているぞ！」

果物屋のおばさんが、果物を持って駆けてくる。

「これ、もって行つて食べなさい」

花屋の女の子が花束をミイナに差し出し、門番をしていた神官兵が、ミイナの為に祈りを捧げた。

「……うう、いや、違……」

嫌と言えない雰囲気、ミイナがたじろぐ。その隙について王がミイナの手を振り払い、強引に馬車の中へとミイナを押し込んだ。

「王様あ」

「行くのじゃミイナ。国民の期待を裏切るでない」

「……私に対して相当悪いことしていますけど、自覚はありますか？ 王様」

もう断れそうに無い。ミイナは悔しさを滲ませて王を一度睨むと、御者席に向かう。

「御者くらい用意してくれてもいいのに」

「行け、ミイナよ！ そなたなら必ず魔王を退治できると信じておるぞ！ 祝福を！」

調子のいい王に溜息が漏れる。

「王様、無駄に煽らないで下さい。はあ、もう……！」

やけくそ気味に覚悟を決め、ミイナは手綱を強く握った。

「はいはい。行けばいいんでしょ！」

大歓声の中、取り敢えず隣国にいる勇者の子孫に会いに行くことに決め、神官ミイナは馬車を走らせた。

2 死相が見えるんです、たまに。

「ひぎゃー!」

今まで生きてきて、一度も出したことのないような絶叫が口から飛び出す。

「や、やば、怖……」

魔物の数が増えている。以前はたまに見かけるくらいだったのに、今は周辺に、魔物がゴロゴロといた。これも魔王復活の証なのか。ミイナは必死で馬車を御して、走り抜ける。弱い魔物ばかりだが、それでも回復魔法しか使えないミイナにとっては強敵だ。

睡眠も休憩もせずにひたすら逃げまくり、翌日の朝、ミイナはやっと隣国に辿り着いた。

「つ、疲れた……」

セインから少し西にあるのがここ、『魔法使いの国マジンタ』である。

もつとも、『魔法使いの国』と言っても、実際に魔法が使える者は僅かしかない。むしろ『魔法研究の国』という方が現代では合っていた。

「久し振りだな、マジンタ。確か家はこっちの方に……あ、あった!」

目当ての勇者の子孫の家を見つけ、ミイナは馬車を止める。そして馬車から降り、レンガで出来た小さな家のドアをノックも無しに開けた。

「おい、生きてるー? って——え!？」

家の中に入った途端、その惨状にミイナは驚き目を見開いた。

うつすらと埃の積もった室内、散乱した書物、そして——血塗れで倒れる男。

「何してるの!？」

ミイナは男に駆け寄り、回復魔法を唱えた。

「カンチ！」

眉が微かに動き、男は目を開ける。

「う……あ、ミイナ？」

「レイ、大丈夫？」

ミイナが床に座り込み、男の青白い顔を覗き込む。

「……ああ、ありがとう」

男の名前は『レイ』。

肩まで伸びた濃い茶色の髪、細身の体、優しい瞳の美青年である。そしてこの魔法の国で数少ない、本物の魔法使いでもあった。

レイはのろりと体を起こし、血のべったりと付いた手を額に当てた。

「色々調べてたら、吐血しちゃって……」

ミイナが溜息を吐く。

「相変わらず体が弱いね。さっきちょっと死相が見えたよ。気をつけなきゃ駄目！」

レイは苦笑して頷いた。

「ところで、ミイナがマジンタに来るなんて珍しいね。どうしたんだい？」

同じ勇者の子孫として、子供の頃に両親を亡くしたミイナの後見人をレイはしている。それゆえにレイがミイナの様子を見に定期的にセインまで行くので、ミイナがマジンタを訪れることはあまりない。

ミイナがうーんと唸る。

「いや、実は、最近魔王が復活したでしょ？　で、王様が私に魔王を退治しに行けって言っただけと……」

レイが「え!？」と驚いた。

「相変わらず強引な方だね、セインの王様は」

「マジンタの王様は何も言わないの？」

「魔王について調べるように命令されているよ。それで何か倒す手段はないかと調べていたんだけど……」

「見つかった？」

レイは静かに首振る。

「そっか……」

溜息を吐くミイナの頭を、レイが血の付いてない方の手で撫でた。
「困るよね。僕達は勇者の子孫であって、勇者ではないんだけど……」

……

「そっだよ、迷惑だよ」

「魔王退治なんて考えただけでも——うげえ！」

ミイナは素早くレイの吐血を避け、回復魔法を唱える。

「カンチ！」

レイが荒い息を吐いてミイナに謝った。

「ごめん」

「うん、いいよ。でも本当に大丈夫？　いつもの倍、体が弱ってる感じがするけど」

心配するミイナに微笑み、レイは近くにあった布で床の血を拭く。
「で？　ミイナはセインを追い出されたのかい？」

「うーん、追い出されたというか、出て行かざるを得ない状況にされちゃった。でもさ、無理だよ。だいたい魔王って何処にいるの？」

投げ遣りな態度のミイナに、レイが血塗れの布をゴミ箱に捨てながら答えた。

「世界の中心にある、孤島にいるらしいよ」

「そうなの？　でもそんなところまで行けないよ。どうすれば……」
唇を尖らせ俯くミイナの顔を、レイは覗き込む。

「僕も一緒に行くよ」

ミイナがパツと顔を上げた。

「本当！？」

「うん。僕もちょうど、魔王のことを調べる為に旅立とうかと思っ
ていたから」

壁に手をつけて立ち上がるレイに合わせて、ミイナも立ち上がる。

「良かった。正直これからどうすればいいか分からなくて……」

「でも、僕達だけで旅をするのは、どう考えても無理があるね」

「うちの王様は、他の子孫を集めろって言ってたけど、誰か知って
る？」

ああ、とレイは頷いた。

「そうか。それなら、ウォル国にいるよ」

「え、本当？」

「うん。戦士をやっている。凄くいい奴だから、事情を話せばきつ
と力になってくれるよ」

ミイナが拳を握り、喜ぶ。

「戦士！ いいね！」

「決まりだ。準備をするからちょっと待ってて」

レイは部屋に散らばる本を数冊と、着替えを鞆に入れた。

「ウォル国って馬車でどれくらいかかるの？」

レイが首を傾げる。

「馬車？」

「あ、そうか、言ってなかったっけ。王様が馬車をくれたんだ。家
の前に置いてあるよ」

「へえ、セインの王様はそこまでしたんだ。よし、準備が出来た。
外へ行こう」

二人は家の外に出た。

「ミイナ、ウォル国までは移動魔法で一気に行こう」

荷物を馬車に積みながら言うレイに、ミイナが驚く。

「移動魔法なんて使えるの？」

「うん。一応ね」

「うーん、さすがマジンタ国一の魔法使い。頼りになる！」

感心したように頷くミイナにレイは笑い、杖を右手に持って掲げ、魔法を唱えた。

「それじゃあ行くよ。ビュン！」

二人と馬車が、一瞬で消える。

伝説の勇者の子孫、魔法使いのレイが仲間になった。

3 不在の理由

「カンチ！ カンチダ！ カンチシロ！」

小回復、中回復、大回復。

ミイナが三種類の回復魔法を唱えると、白目を剥いて地面に倒れていたレイの体がぴくりと動いた。

「はあ、びくりした」

ミイナがほつと胸を撫で下ろす。

レイはゆつくりと体を起こし、頭に手を当てて申し訳なさそうに微笑んだ。

「ごめん。移動魔法は結構大きな力を使うから、ちょっと体に負担がかかったみたいだ」

ミイナが頬を膨らませる。

「もう！ 危うく旅立ち早々一人旅になるところだったよ」

「ごめんね。僕は回復魔法が使えないから、ミイナと一緒にいてくれて助かるよ」

レイはもう一度謝って、周りを見回した。

「僕達、注目浴びてるね」

「そりゃ、いきなり現れて死にかけてたからね」

二人は移動魔法『ビュン』を使って、マジンタから北北西の方角にある『ウォル国』にやってきた。

「さて、戦士に会いに行こうか」

レイが杖で体を支えて立ち上がると、遠巻きに見ていた屈強な体つきの人々が、警戒するように身を引く。

「なんだか凄い目で見られてるけど、私達、攻撃されたりしない？」

「大丈夫だと思うよ。この国は『戦士の国』なんだ。一般国民は魔法を見る機会なんて滅多にないから、驚いてるだけだよ」

「へー、そうなんだ」

レイが馬車の手綱を引いて歩き出す。ミイナはその横を歩きながら、レイに話しかけた。

「私、勇者の子孫ってレイしか会ったことがない」

「僕もこの国の――ああ、そういえばまだ名前を覚えていなかったね、この国にいる勇者の子孫は『ガイン』って名前なんだ。で、そのガインとミイナしか会ったことはないよ。しかもガインと会うのは何年ぶりかな？ 男らしい真面目な奴だよ」

「ふーん、協力してくれるといいけど」

「きつと大丈夫だよ。えーとその角を曲がってすぐだけど……」

レイは角を曲がって、二件目にある家の前に止まった。

「ここだ。こんにちは、ガインは居ませんか？」

トントンと玄関ドアを叩きながら、レイが声を掛ける。しかし中からの応答はない。

「留守？」

ミイナが訊き、レイが首を傾げた。

「おかしいな。ガインは仕事で居なくても、ガインのお母さんが家に居る筈なんだが。買物にでも行ってるのかな？」

「ガインの仕事って何？」

「城の兵をしている」

レイは国の北にある、ウォル国の城に視線を移す。

「ここで待っていてもいつ帰ってくるか分からないし……、城に行ってみようか」

「うん」

「じゃあ、ちよつと距離があるから馬車で移動しよう」

レイがそう言いながら馬車に乗り込む。

「……歩いてでも十分行ける距離だと思うけど」

ミイナは小さく呟いたが、それでも体の弱いレイに付き合って馬車に乗り込んだ。

ミイナが座つたのを確認して、御者席に座つたレイが手綱を握る。馬は右へ左へと、よろよろとしながら城に向かって歩いた。

「なんか、やたら揺れてるよ」

「ごめん、僕は御者なんて初めてだから、上手く出来なくて……」

「レイ、交代」

ミイナがスパツと言ってレイを退かし、御者席に座る。そして――

「それ行け！」

手綱で馬を叩く。

馬は嘶くと、猛スピードで走り出した。

「ミイナ！ 早い！ 危ないよ！」

焦るレイをよそに、ミイナはのんびりと答える。

「大丈夫だよ、このくらい」

「駄目だよミイ――う、うげえ！」

「ぎゃあ！ カンチ！」

ミイナが慌てて回復魔法を唱え、馬車を止めた。

「ご、ごめ……馬車酔い……」

「これぐらいで馬車酔いって……」

ミイナの魔法で回復したレイは、まだ少し荒い息を整えて、額の汗を拭う。

「ミイナ、もっと優しくしないと馬も疲れちゃうよ」

「うーん、もう。仕方ないなあ」

ミイナは唇を尖らせて極力ゆっくりと馬を歩かせ、程なくして馬車は城の前に着いた。

「到着！」

ミイナが馬車から飛び降りて、城門の前に立っているガツチリとした体型の兵に挨拶をする。

「こんにちは」

「こんにちは。あなたは旅人ですか？ ようこそ『戦士の国ウォル』へ！」

兵は大きな声で言って、敬礼をした。ミイナが兵の真似をして敬礼を返す。

少し遅れてレイも馬車から降り、兵に微笑んだ。

「こんにちは。僕はマジンタから来たレイという者です。この城の兵であるガインに会いに来たのですが、取り次いでもらえませんか？」

すると途端に兵が目を見開いて、レイとミイナを交互に見た。

「ガインに、か？」

その戸惑った様子に、レイが首を傾げる。

「何か不都合でもあるのですか？」

「いや、不都合と言うか……」

兵は唇を歪めて、悲しげな表情で城を指差した。

「ガインなら城に居る。城の——地下にある牢屋に……」

レイとミイナが「え!？」と驚いて顔を見合わせた。

4 面会

「街中で突然暴れ出してね……」

城の地下へと続く階段を降りながら、看守が言う。

「怪我人こそ出なかったが、物は結構破壊されたし、ガインの両親は自慢の息子の思いもよらない行動に驚いてぶっ倒れちまったし、その上やつと大人しくなったガインから話を聞けば、どうしてこんなことをしたのか分からないと言うばかりで……」

看守は溜息を吐いた。

「で、原因が分からないんじゃないやまた暴れる可能性もあるから牢に入るしかなかったんだ。——これはもしや魔王の復活と何か関係があるのではないかという噂もあるが……。ただどな、誰もガインが牢に入ることなど望んでいない。あいつが良い奴だってみんな知っているからな。」

看守の後ろを歩いていたレイが頷く。

「そうですか。僕も信じられない。ガインが暴れるなんて」

「そうだろう？」

看守が振り向いた。レイが力強く言い切る。

「ええ。ガインは男らしくて頼りになる戦士ですから」

「ああ、そうなんだ。ガインはいい奴なんだ。この前もな——」

妙に盛り上がる二人の会話に、ミイナが強引に割り込んだ。

「ところで……」

二人が振り向く。ミイナは自分の背後を指差して、首を傾げた。

「後ろの人は、ストーカーですか？」

ミイナの背後の影がピクリと震える。看守が首を振った。

「いいや。あの方は王様だ。側近のガインが心配だが立场上罪を許

すことも出来ず、日に何度もこつそり様子を見に来られるのだ。見てみぬ振りをしてくれるとありがたい」

ミイナが後ろを振り返る。

「全然『こつそり』になつてないよ、王様。もつと堂々とすればいいのに。うちの国のもだけど、王様つて変人が多いのかな？」

「……ミイナ」

不敬な発言をするミイナをレイが諫め、兵が苦笑する。

「王様を含め、戦士は隠し事が苦手なんだ。——ああ、着いた」

城の地下にある牢屋に辿り着き、看守はすぐ近くの鉄柵の前まで行つて立ち止まった。

「ガイン、面会だぞ」

看守が声を掛けると、牢屋の中で壁に向かって座っていた男が振り向く。

「ガイン……！」

レイが柵を握りしめる。

柵の中の男が、目を見開いて立ち上がった。

「レイ……」

ミイナがレイの袖を引く。

「ねえ、この人がガイン？」

「ああ、そうだよ」

ミイナは「ふーん」と唸りながら、近付いてくるガインを上から下まで眺めた。赤い短髪と凛々しい眉毛。背が高く、がっしりとした体をしている。

そんなミイナの不躰な視線に少々驚きながらも、ガインがレイに訊いた。

「その子は？」

「あ、紹介するよ。僕達と同じく、伝説の勇者の子孫ミイナだ。以前話したことが無かったかな？ セインの神官だよ」

「ガインが「ああ……」と頷く。

「そうか、君が。はじめまして、ガインだ」

「ガインが柵の間から右手を差し出し、ミイナがその手を握った。

「はじめまして、ミイナです」

「ところでレイ、どうしてここに？」

「ガインの質問に、レイが微かに眉を寄せる。

「僕達は、魔王を退治する方法を求めて旅に出たんだ。それでガインにも同行してもらいたいと思ってウォルに來ただけと……」

「レイは言葉を濁し、ガインが俯いた。

「すまない。協力したい気持ちはあるが……」

「レイが首を傾げる。

「どうして暴れたんだい？」

「……分からない」

「分からないって……」

「そんなことがあるのだろうか？」

「本当に分からないんだ」

「ガイン……」

「ガインは苦しげに拳を握りしめた。

「……」

「……」

「会話が途切れる。広がる静寂。レイもガインも看守も、こっそり付いて来ているつもりのウォル国王も何も言わない。

「あのさあ」

「そこに一人、暗い雰囲気能耐えられなかったミイナが、左手に持っていた杖で柵をコンコンと叩いた。

「暴れた理由が分からないって、どういうこと？」

「ガインが首を横に振る。

「本当に分からないのだ」

「もつと詳しく教えて。暴れた日のこと」

ガインは頷き、語り始めた。

「あの日、仕事が休みだった俺は、特に用事も無かったので母親と協力して家の大掃除をすることにした。傷みの激しい壁を塗り直し、家具の配置替えをして——するとその時、ふと壁の一部に違和感があることに気付いた。近付いてよく見ると、俺が左右の掌を広げたくらいの大きさ分だけ、後から作り直したような跡があった。過去の修繕後なのだろうと母親は言ったが、何故か妙に気になり、母親を説得して思い切ってハンマーでその壁を壊してみたのだ。するとそこに、これがあった」

ガインが腰の辺りから何かを取り出す。ミイナとレイが眉を寄せた。

「短剣？」

鞘に細かな細工が施された短剣を、ガインは目の高さまで上げる。「ああ。何故壁の中にあつたのか疑問に思いながら何気なく鞘から抜いたのだが……、その途端、体が言うことをきかなくなってしまい、家の中で散々暴れた後、街の中でも自分の意思とは無関係に剣を振り回してしまった。破壊した果物屋のりんごを踏んで転び、気を失うまでずっと、止めたいのに止められなかった」

悔しさが滲む口調でガインは言い、レイが唸って短剣を見つめた。「体が勝手に？ うーん。もしかして、その短剣に何かあるのかな？ ちょっと貸してくれないか？」

しかしガインは、溜息を吐いて首を横に振る。

「それが、離れないのだ」

「離れない？」

「うむ」

「……ガイン、短剣をこちらに」

レイが手を差し出し、その上にガインが短剣を握ったままの手をのせた。

「ガイン、離して」

「離せないのだ。この牢に入る前にも短剣を差し出すように言われたのだが、どうしても離せないのだ」

ガインは益々強く、短剣を握り締める。レイが困った顔でガインを見つめた。

「ガイン、落ち着いて深呼吸をして、それからゆっくり手を開いてみて」

「無理だ」

「ガイン……」

「離せない」

と、その時――。

「あのー……」

横に居たミイナが、揉める二人に声を掛けた。

「ん？ どうしたんだい、ミイナ」

レイが振り向く。

「たぶん、なんだけどさあ」

ミイナは軽く首を傾げ、短剣を指差した。

「その短剣、呪われてるよ」

レイとガインが目を見開いた。

レイとガイン、看守と王もミイナの発言に固まる。

ミイナは目を眇めて短剣を見つめた。

「微かにまがましい魔力を感じるから、呪われてる……と思うよ。レイは分らない？」

「……………」

レイが柵越しに、短剣に顔を近づける。

「変な気は感じていたから、もしかして何らかの魔法がかかっているのかと思っていたんだけど……、そこまでは分からなかったよ。

ミイナ、解呪魔法は？」

ミイナは口を尖らせた。

「そんなこと出来ないよ。呪われた武器なんて見るのも初めてだし、解呪魔法が使える神官も、私の知るかぎりではないよ」

レイが眉を寄せ、顎に手を当てた。

「短剣を抜くと暴れる、のか？ では短剣を抜かなければ普通に生活出来るのでは？」

「うーん、こればかりは分からないけど、そんな簡単にいくかな？」

「解呪魔法以外に、何か方法は無いかい？」

「短剣が折れたら呪いも解けると思っけど……そうそう簡単には折れないと思う」

「……………」

レイが無言で短剣を見つめ、ガインが呟く。

「俺は……呪われているのか？」

ミイナは頬に右手を当てて頷いた。

「うん、たぶんね。呪われた装備品で現存するものって聞いたこと

がないから、ある意味貴重なお宝なんだけど……。困ったな、魔王退治を手伝ってもらおうと思ってたのに、呪われてるんじゃないか」

溜息を吐くミイナ。

ガインがシヨックを隠しきれない様子で目を閉じ、王がよろめき膝をついた。

「ちよつと王様、さつきからちよこちよこ鬱陶しいんですが」

ミイナが王にツツコミを入れ、看守が王の体を支えた時――。

「ガイン、一緒に行こう」

レイの発した言葉に、ミイナたちは驚いた。

「え？　ちょ、レイ。呪われてるんだよ？」

レイは振り向き微笑む。

「世界は広い。もしかすると、旅先で解呪が出来る人が見つかるかもしれない」

「でも……」

渋るミイナの頭をレイは撫でた。

「勇者の子孫同士、困った時は助け合おう。それにガインは強いから、うまく呪いが解けたら強力な戦力になるよ」

「……………」

ミイナはガインを見上げた。確かに鍛え上げられた体は、通常ならば強力な戦力になるのだろう。しかし……。

ひたすら見つめっていると、ガインが戸惑い視線を彷徨わせた。そして――。

「ミイナ殿！　余からも頼む。どうかガインを連れて行ってやってくれ！」

「王様うるさいです。いきなり大声出さないでください」

ミイナが王の方を振り向いて眉を寄せる。王は看守を支えにして

立ち上がり、ミイナに訴えた。

「このままではガインは一生を牢屋で暮らす羽目になる。同じ勇者の子孫として、不憫には思わないか？」

「勇者の子孫ってだけで『魔王退治に行つて来い』と国を追い出された私も、相当可哀想だと思います。」

「可哀想な者同士、身を寄せ合つて頑張るがよい！」

「……王様つてやつは、どうしてこんなに身勝手なんだろう」

育てられ方が悪かったのかな、と毒づきながら、ミイナはガインに視線を戻して息を吐いた。

「……うん、でもそうだね。とりあえず一緒に行こうか。解呪出来る人を探そう」

ミイナが笑顔で言う。しかしガインは沈んだ表情で首を横に振った。

「いや、駄目だ。それは迷惑がかかる」

「まあ、どうなるか分かんないけどいいよ。『魔王退治』つてのがそもそも無茶苦茶なんだもん。それ考えたら呪いくらい大丈夫な気がしてきた」

「……………」

レイがガインに微笑む。

「ガイン、行こう」

「……本当にいいのか？」

レイは頷き、ミイナが看守に指示を出す。

「看守さん、牢屋の鍵開けて」

牢屋の扉が開けられ、ガインは出てきた。レイが励ますようにガインの肩を叩く。

王がガインの前まで行き、重々しく言った。

「呪われていたとはいえ、暴れた事実は変わらない。国をあげて大々的に送り出すわけにはいかないが、せめてこれを持っていくがよ

い

王は自分の腰に佩いていた剣をガインに差し出した。ガインが驚く。

「王様、これは王家に伝わる剣ではございませんか！ いけません」

「よい。呪いが解けたら、必ず返しに来るのだぞ」

「王様……」

ガインの目に涙が浮かび、レイと看守も目頭を押さえた。

涙の別れ——だがそこでミイナが王の服を引っ張った。

「王様、私も何か欲しいな」

王が振り向く。

「うむ、そうか。だが……すまんがこの国はそれほど豊かではない」

「ええー」

不満顔のミイナをレイが小声で諫める。

「ミイナ」

「はい。もう、仕方ないなあ」

ミイナが頬を膨らませ、レイが苦笑した。

「さあ、行こう」

「うん」

「ああ」

ミイナが歩き出し、他の者も後に続く。

伝説の勇者の子孫、呪われた戦士ガインが仲間になった。

6

攻撃は最大の防御？

釈放されたガイン、それにミイナとレイは裏口から目立たぬよう城の外へと出た。

「さて、これからどうしよう」

レイが顎に手を当てて言い、ミイナはガインに視線を向ける。

「この国で魔王退治を手伝ってくれそうな人はいない？」

ガインは首を横に振った。

「魔物から国を守るのに精一杯で、そんな余裕はないだろう。それにこれだけ騒ぎを起こしておいて頼むのも気が引ける」

「この国には他に勇者の子孫は居ないの？」

「俺の母が勇者の子孫だが、剣など持ったことがないごく普通の主婦だ」

ガインの言葉に、レイが「そういえば……」と思い出す。

「お母さんが倒れたと聞いたが、会いに行かなくていいの？」

「ああ。こんなに迷惑をかけて、両親に合わせる顔など無い。俺が旅立ったことは陛下から伝えてもらうことにした」

「……そうか」

レイは励ますようにガインの背中を軽く叩いた。ミイナが唸る。

「それじゃあレイ、他に『勇者の子孫情報』は無いの？」

「うーん、僕は知らないな。ガインは何か知ってるかい？」

ガインが「ああ……」と頷いた。

「それならホーダイ国に勇者の子孫が住んでいると聞いたことがある。確か格闘家だと言っていたな」

格闘家の勇者の子孫――。

あっさりもたらされた有力情報に、ミイナが歓声を上げた。

「格闘家！ 即戦力になりそう！ レイ、さっそく移動魔法でホーダイに行こうよ！」

笑顔のミイナに、しかしレイは困ったように頭を掻いた。

「うーん、それは無理なんだ」

「え？」

ミイナが首を傾げる。

「それってもしかして、体に負担がかかるから？ それなら大丈夫だよ。死にかけてもちゃんと回復してあげるから」

「いや、そうじゃなくて……」

レイは申し訳なさそうに笑い、ミイナの頭を撫でた。

「一度行ったことのある場所にしか、移動魔法では行くことは出来ないんだ」

「……………」

一瞬遅れて言葉の意味を理解し、ミイナが目を見開く。

「ええ！？ そんな、どうするの？」

「地道に馬車で行くしかないね」

ミイナは眉を寄せ、口を尖らせた。

「……う、地道……いや、仕方ないか。でも魔物に襲われたら魔法でやつつけてね」

「ああ、分かっているよ」

「じゃあ出発！」

兵の手により既に裏口に回されていた馬車に乗り、勇者の子孫達はウオル国から出る。

御者席には『せめてそれくらいは役に立ちたい』と立候補したガインが座っていた。

「ところでホーダイ国って何処ら辺にあるの？」

ミイナの質問に、レイが荷物の中から地図を取り出す。

「ここがウオル国。ホーダイはウオルから南東の方角、セインのずっと北にあるんだよ」

「へー。どんな国？」

「さあ？ 僕も行ったことがないから詳しくは——」

その時、御者席から鋭い声がした。

「魔物が現れたぞ！」

馬車が停止し、ミイナとレイが御者席に集まる。

馬車の前には、長い毛の生えた大きな体と大きな口、それに短い四本足の魔物が一頭いた。

「あれ何？　なんか強そうじゃない？」

「『ケドラケカバ』だ」

「よく知ってるね、レイ」

即座に答えたレイにミイナが感心する。レイは荷物の中から一冊の本を取り出した。

「この『世界魔物全集』で勉強したんだ」

レイがパラパラとページを捲り、ケドラケカバについて書かれた箇所を見せる。本には魔物がイラスト付きで分かりやすく紹介されていた。

ふーん、と唸りながらミイナが目の中の魔物と本に描かれた魔物を見比べる。

「あれ？　でも、ちょっとこの絵より体つきががっしりしているしロン毛だよな」

「うーん、もしかして魔王が力を取り戻しつつあるから魔物も強くなっているのかもしれないな」

「嘘、それ困る。……ってそれよりレイ、魔物がこっちに突進して来た！　魔法をお願い——え！？」

ミイナの言葉が終わるより早く——。

「ガイン！？」

「ガイン！」

ガインが短剣を鞘から抜いて馬車から飛び降り、魔物に向かって

いく。

「ガイン、どうしたの!？」

ミイナの叫びに、ガインは振り向かずに応えた。

「体が勝手に動く……!」

「え!？」

鞘から抜いてなくても呪いは発動するのか。やはり簡単にはいかなかったとミイナが顔を顰める。

「根性で何とかならない!？」

両手を口元に当てて大声で訊くミイナに。ガインは同じく大声で返した。

「やってはいる! だが……!」

ガインが両手で短剣を握り、魔物を刺す。魔物も大きな体でガインに体当たりして鋭い牙でガインの肩を噛んだ。ガインが刺す。魔物が蹴る。ガインと魔物の体から血が飛び散った。

「うわ、うわわわ……」

ガインは『メッタ刺し』の技を覚えた。

攻撃されてもひたすら魔物を刺しまくるガインの姿に、ミイナが思わず一歩下がる。魔物が押し掛かれたガインが呻き、地面に血が広がった。

「ぼ、防御! 防御しないと!」

「で、出来ない!」

「そうだ! レイ、魔法で援護して!」

ハッとレイの存在を思い出してミイナが振り向く。すると――。

「うげえ!」

馬車の中も血の海だった。

「なんで吐血してんのよ! カンチ! ほら魔法唱えて!」

ミイナが蹲るレイの襟首を掴んだその瞬間――。

「カバアアアん……」

魔物の咆哮が聞こえた。

ミイナが視線を向けると、魔物は地面に倒れ、その横でガインが肩膝を付いて荒い呼吸を繰り返していた。

「だ、大丈夫!？」

声をかけるとガインが立ち上がり、よろよろと馬車に戻ってくる。

「カンチダ!」

「……ありがとう」

馬車に乗り、崩れるように座り込むガイン。

「……………」

「……………」

「魔物を見た途端、体が勝手に動いて短剣を抜いていた」

「うん。呪いだね」

ガインが額に手を当てる。

「……やはり一緒に行くのは迷惑がかかるな」

「うん、いやでも、戦力にはなるよ。少なくとも肝心な時に吐血するレイよりは」

ミイナとガインの視線がレイに集まる。レイは「ごめん」と小さな声で謝ると、荷物の中から布を取り出して汚れた床を拭き始めた。

「……………」

「……………」

ミイナは大きく息を吐き、ガインの肩を叩く。

「一緒に行こう、ね」

「……ありがとう」

不器用な笑顔を見せるガインにミイナも笑う。

「しかし……防御が出来ないのはキツいな」

「怪我は治癒してあげるから気にせずやろう」

「ああ。分かった」

ガインが御者席に戻り、勇者の子孫達は旅を再開させた。

7 食は体の基本です。

レイが呪文を唱えた。

「ライウ！ ……う！」

やたら元気な二足歩行のトカゲ型魔物、『トカゲンキ』に雷を伴う局地的大雨が降り注ぎ、レイが胸を押さえて倒れた。

「カンチ！」

すかさずミイナがレイに回復魔法を唱える。

飛び出したガインが、なりふりかまわず魔物に突っ込んだ。

「カンチ！！」

「あゝ、疲れた」

停車中の馬車の床にぐったりと寝そべり、ミイナは呟いた。

防御の出来ないガインと体の弱いレイ。その二人への回復魔法の連続使用で、ミイナは疲れていた。

「こんなに魔法使ったのは初めてだよ」

少々嫌気がさすが、かと言って回復魔法を使わなくてはガインもレイも大変なことになる。ひとり取り残されるのだけは、ミイナも避けない。

何もせずにごろごろと寝て魔法に必要な気力を回復させていると、外からレイの声が聞こえた。

「ミイナ、ご飯だよ」

「はい」

返事をして体を起こす。ミイナが休憩している間に、レイとガイ
ンの二人で協力して昼食の準備を整えてくれていた。

「今日の昼食は何かなー？」

明るく言いながら馬車から飛び降りる。しかしすぐ傍で焚き木を
囲んでいるレイとガイン、そしてその足元に置かれた料理を見て――
途端にミイナは顔を顰めた。

「……またこれ？」

今日の昼食のメニュー、いや、朝も昨日もその前の日も同じ料理
を食べた覚えがある。

魔物の肉を火で焼いただけのものと、堅いパン、薄いスープ――。

「もし良かったら、ミイナが作ってくれてもいいよ」

レイに言われて、ミイナは頬を膨らませた。

「私が料理出来ないの、知ってるくせに！」

ミイナはセイン国の城内にある食堂を思い出す。まだ離れてから
それ程日数が経ったわけではないが、黙っていても美味しい食事が
出てきたあの頃が懐かしく感じられた。

「両親と住んでいたガインはともかく、レイは長年独り暮らしして
たんだよね？ それでこのレベル？」

棘のある言葉にレイが苦笑する。

「僕は胃腸が弱いから、いつもこのスープを食べていたんだよ。だ
から他の料理は知らないんだ」

「……………」

まさか魔王退治の旅にこんな落とし穴があるとは。溜息を吐いて
ミイナはガインに視線を向けた。

「ガインだって嫌だよ、こんな料理」

「いや、俺は肉が沢山食べられるので、それなりに満足している」
満足なのか、これで。

「……ホーダイ国に着いたら美味しい料理を食べよう」
それまでもう少し我慢するか、とミイナは座って肉を手にする。
しかしその発言を聞いたレイが、真面目な表情になってミイナを諭した。

「お金は節約しないといけないよ」

「え？」

口に肉を持つていこうとしていたミイナの動きが止まる。

「装備品を買わないといけないだろう？ 一応僕たちは魔王退治に向かっているんだから」

そう言われて、ミイナは自分の格好を改めて見た。防御力など無いに等しいごく普通の神官服に、長年愛用の神官用の杖。レイの格好も似たようなもので、ガインにいたっては牢に入っていた時のままの普段着で、しかもボロボロの上に、替えの服も下着も持つてはいなかった。

「回復担当のミイナは倒れられると困るから出来るだけいい防具が必要だし、ガインも防御が出来ないからいい防具が必要だ」

レイの言葉にミイナは素直に頷く。

「そうだね。少なくとも防具は揃えたいね。でもそれって、いくらぐらいするのかな？」

レイが眉を寄せて唸った。

「うーん、ピンからキリまでだろうけど……、出来れば腕のいい装備品職人さんのオーダーメイドで作りたいな」

「オーダーメイドか。腕のいい職人さんって何処に居るの？」

「ごめん、知らない」

ミイナはガインに視線を移す。

「俺も知らない」

「……………」

装備品職人も探さなくてはならないのか。うんざりとするミイナに、レイが追い討ちをかける。

「その前に、お金をもう少し稼がないといけないよ。装備品だけじゃなく、世界の中心の孤島に行く為の船も要るからね」

「……………」

ミイナが、がくりと項垂れた。

「そんな……。お金なんてどうやって稼ぐの？」

「魔物の毛皮を売ったりするしかないかな？　だからお金は出来るだけ節約しよう」

「……………うん。これから大変だね」

はあ、と大きな溜息を吐いて、ミイナは肉に齧りつく。不味い。

「ホーダイに着いたら、せめて調味料くらいは買ってもいいよね？」
眉を寄せて訊くミイナに、レイは笑った。

「勿論」

「やった！　じゃあ早く食べて出発しようよ」

勇者の子孫達は昼食を急いで食べ、馬車に乗って移動する。そして――。

「あれがホーダイ国ではないか？」

ガインの言葉に、ミイナとレイが御者席に集まる。

夕日の中、まだ小さい影ではあるが、確かに国らしいものが見えた。

「ホーダイ国のようだね」

レイが肯定し、ミイナが笑顔で指示を出す。

「急げ、ヒヒリーヌ！」

レイとガインが首を傾げた。

「ヒヒリーヌってなんだい？」

「この馬の名前だよ。今付けた」

「へえ、ヒヒリーヌか」

ガインがヒヒリーヌを手綱で叩き、馬車がスピードを上げる。それから休憩も無くひたすら走り、日が暮れてすっかり暗くなつた頃、勇者の子孫達はホーダイ国に辿り着いた。

「やけに賑やかだが、どうなっている？」

着いて早々、ガインは眉を寄せた。

国中にかがり火が焚かれ、笛や太鼓の音が響いて国中が異様に明るい雰囲気包まれている。

「うーん、なんだろ？」

疑問を抱きつつも勇者の子孫達は馬車から降りた。

「あ！ 屋台が出てるよ」

「何があつたか訊いてみようか」

馬車を引いていき、ミイナがすぐ近くの屋台の店主に話しかける。

「あの、すみません。なんでこんなに賑やかなんですか？」

屋台で長いソーセージを焼いていた店主が顔を上げた。

「ん？ あんたたち旅人かい？ 『食の国ホーダイ』によっこそ。祭り開催中だよ！」

「祭り？」

首を傾げるミイナに、店主はソーセージを高々と掲げて答える。

「『魔王復活！ もうどうにでもなれ大食い祭り』だよ！」

満面の笑顔の店主に、ミイナは啞然とした。

「……何それ」

ガインも唸る。

「この国はヤケになっているのか？」

店主はソーセージをミイナに差し出した。

「ほら、お嬢ちゃん達も食べていきな」

目の前の肉汁滴るソーセージに、ミイナが唾液を飲み込む。昼に食べた肉とは比べ物にならないほど美味しそうだ。

食べたい。

受け取るうか一瞬迷って、ミイナは悔しそうに首を横に振った。

「でも私達お金が……」

無駄遣いは出来ない。しかし店主は豪快に笑ってミイナの手にソーセージを持たせた。

「大丈夫。このお祭りに出ている料理は全部タダで食べ放題だよ。もうすぐ魔王にみーんな殺されるから、金なんて持っても仕方ないだろ？」

店主がウィンクをする。レイが眉を寄せて呟いた。

「……明るく諦めているのか」

どうやらホーダイ国は、魔王に殺される前に国を挙げてどんちゃん騒ぎをするという選択をしたようだ。

「凄いやホーダイ国。ところでおじさん、この国に勇者の子孫っていませんか？」

「ああ、いるよ」

「何処にいるか分かります？」

「んー、たぶん……」

店主はソーセージで、かがり火によってオレンジ色に輝く城を指した。

「城の前で行われている、大食い大会に参加していると思うよ」

「……え？」

大食い大会？

勇者の子孫達は顔を見合わせた。

「決勝戦に残ったのはこの三人！ 胃袋魔人キュウタ、食欲妖精カレン、そして——伝説の勇者の子孫、チャンピオン・シータだー！」

司会者の言葉で、城の前に集まっていた観客が大きな歓声を上げる。凄まじいまでの盛り上がり。舞台の上に置かれた見たこともない巨大な皿に、これまた見たこともない数の饅頭が山と積まれていた。

ミイナが眉を寄せて、ガインに視線を向ける。

「……あれが勇者の子孫？ 格闘家じゃなかったの？」

舞台上の勇者の子孫の男、シータは、緑色のツンツンとした短い髪に、丸い顔、丸い目、そして——大きな丸い体をしていた。どう鼻屑目に見ても、格闘家の体型ではない。

「人間じゃなくて巨大な饅頭でしょ？ あれ」

指を差すミイナをレイが諫める。

「ミイナ、失礼だよ。……でもおかしいな」

「そうだよな。ガイン、どうなってるの？」

ガインは顔を顰めて首を振った。

「俺も、ホーダイ国に格闘家の勇者の子孫が居ると噂で聞いていただけなので、分からない」

「ええ？ 不確かな情報でここまで来たっていうの？」

「そう言われても……だが勇者の子孫であることは間違いがないようだ」

「それはそうだけど——」

ミイナが反論しようとした時、ドラの音が鳴り響いた。舞台上の三人が一斉に饅頭を食べだす。見る見るうちに無くなっていく饅頭。特にシータは——。

「うわ、ちょっと！ あれ、饅頭を丸呑みしてない？」

「う、見ているだけで気持ちが悪く……」

「レイ、こんなところで吐かないでよ。カンチ」

ドン引きするミイナとガイン、地面に蹲るレイとは対照的に、観客は大いに盛り上がっていた。

「頑張れー！」

「シータ！」

「もっと食べー！」

ミイナが呆れて周りを見回す。

「この国、本当にもう『どうにでもなれ』な感じなんだね」

ガインは顎に手を当てて唸った。

「元々明るい国なのか、それとも恐怖で感覚がおかしくなっているのか……」

「うーん、どうなんだろう？」

ミイナが首を傾げた時、司会者が興奮した声を上げた。

「さすがチャンピオン！ あつという間に饅頭が無くなっていく！ 凄いぞ凄いぞ！」

ミイナがガインの袖を引く。

「さつきから司会者が言ってる『チャンピオン』って何のチャンピオン？」

「……さあ、なんだろう？」

再びドラの音が鳴り、戦いの終わりを告げた。

「優勝は、チャンピオン・シータ！」

大きな歓声と拍手。夜空に打ち上げられる花火。

頭上に咲いた光の花々を驚いて見上げる。ミイナもこれにはさすがに歓声を上げた。

「うわー、綺麗！ レイ、見てみなよ」

レイがゆつくりと青い顔を空に向けた。

「ああ、凄いな」

「綺麗だねー」

ボーッと空を見上げる。その間に、舞台上では表彰式が始まっていた。

「チャンピオン・シータには、王様から賞金が贈られます！」

ミイナが司会者の言葉に、ハツとして舞台に視線を向ける。

「賞金だつて！ いくら貰ったんだろう？」

王様から賞金を受け取ったシータは観客に手を振ると、巨体を揺らして舞台から降りた。

「あ、終わったんだ。えーと、どうする？」

ガインに支えられてレイが立ちあがる。

「そうだね、とりあえず話してみようか」

「ん。分かった」

まだ興奮冷めやらぬ人々を掻き分け、ミイナはシータに向かって進む。

「おーい！ 待って、勇者の子孫！ えーと『シータ』だっけ？ 待っててば！」

シータの歩みが遅いことが幸いした。三人は何とか追いつき、ミイナがシータの袖を掴んだ。シータが「ん？」と振り向く。

「あの、伝説の勇者の子孫ですよね？」

「ああ。おいら勇者の子孫だよ」

シータが頷き、間延びした口調で答えた。

「えーと、私達も勇者の子孫で、今魔王退治の旅の最中なんです」

「へえー！ あんたたちも勇者の子孫なのかあ。よかったらうちに

来なよ。お茶にしよう」

歩いて行くシートタ。

「あ、ちよつと待ってよ！ もう！」

「なんと言つか、マイペースな感じのする男だな」

ガインが人ごみに疲れたレイを抱きかかえるようにして支えながら呟く。

シートタは屋台の料理を次々手に取り食べながら、「こっちだよ」と自宅に三人を案内した。

「どうぞ座つて。何か食べるう？」

家に着くとすぐ、シートタは大量の菓子を戸棚から出してテーブルの上に置いた。

レンガで造られた四角い家は、そこそこの広さがあるにもかかわらず、シートタの巨体のせいで狭く感じる。

「えーと、じゃあ」

ミイナはお菓子を漁り、ガインがぐったりとしているレイを椅子に座らせて、シートタに訊いた。

「我々は、ホーダイ国に勇者の子孫の格闘家がいると聞いてやって来たのだが……」

シートタが菓子を手に取りながら頷く。

「ああ、うん。おいら、前は格闘家だったよう」

「前は？」

眉を寄せるガインにシートタは笑った。

「おいら、転職したんだ」

その言葉に、ミイナが菓子を掴んだ状態で顔を上げて首を傾げる。

「転職？」

「そつだよ」

「じゃあ今は……？」

「『大食いチャンピオン』だろう」

きつぱりと言い切るシート。ミイナとガインが顔を見合わせた。

「失礼だが、それは職業ではないのではないか？」

「大食い大会の賞金で暮らしているし、みんなおいらのことを大食いチャンピオンって呼ぶよ。だからおいらの職業は大食いチャンピオンだろう」

「……………」

しまった、これは無理だ。とても魔王退治を手伝ってもらうような雰囲気ではない。

ガインが唸り、ミイナが溜息を吐いて頭を掻く。

「で、あんたたち何しに来たの？」

シートが無邪気に質問し、ミイナは棒状の飴を弄びながら口を尖らせた。

「え？ 魔王退治を手伝ってもらおうかと思ったんだけど……………」

「いーよ」

「へ？」

ミイナとガイン、それに青い顔で細い息をしていたレイも驚いて目を開ける。

「おいら、ちょうど美味しい物探しの旅に出ようと思ってたんだよう」

笑顔で軽く言うシートに、ガインが啞然として訊いた。

「魔王退治だぞ？」

「うん。あ、そうだ、今夜はうちに泊まりなよ。明朝出発でいいよねえ」

「……………」

伝説の勇者の子孫、大食いチャンピオン・シートが仲間になった。

朝、目覚めると、食べ物に囲まれていた――。

「……何これ？」

ミイナが眉を寄せ、枕元にある団子を手取る。

「おはよう。朝ごはんだよ」

声のした方を見ると、朝っぱらから昨日の祭りの残り物らしき肉の塊に噛り付いているシータと目が合った。

「……おはようシータ。この家では人が寝てる枕元に朝ごはんを置くの？」

「食べ物の匂いで目が覚めると、嬉しいよねえ」

「シータはそれでも私はそうじゃないの」

変なのが仲間になったと思いつつ、ミイナは起きる。

昨夜一緒に雑魚寝した仲間達は皆起きており、既に着替えて身なりも整えて、やはり祭りの残り物とおぼしき物を食べていた。

「おはよう、ミイナ」

レイが微笑む。

「おはようレイ。あれ？ ガインその服どうしたの？」

昨夜までボロボロの服を着ていたガインがまともな格好をしているのを見て、ミイナが首を傾げた。

「シータが痩せていた頃の服をくれたのだ」

「へえ、良かったね。シータって昔は痩せてたんだ」

シータが頷く。

「おいら、転職してから激太りしたんだよねえ」

「……なんで転職なんてするのよ」

ミイナは溜息を吐いて、みんなと一緒に朝食を食べ始めた。

「で、これからどうするの？ 他の勇者の子孫が何処にいるか知ってる？」

ミイナの言葉に、レイとガインが首を横に振る。

「ごめん、知らない」

「知らないな」

「おいら、妹がいるよ」

ミイナ達が「え？」とシータを見た。

「本当に？」

「うん。飲食店経営現在妊娠中だよ」

「……それじゃ駄目じゃない」

はあ、と溜息を吐き、ミイナはシータに訊いた。

「じゃあこの国に、魔王退治に協力してくれそうな強者と、あと解呪が出来る人はいいる？」

「解呪？」

首を傾げるシータに気付く。そういえばガインが呪われていることを教えていなかった。

ガインが苦い顔でシータに説明する。

「実は、俺は呪われていて……」

シータは一通り話を聞き終わると、「へー」と頷いた。

「それは大変だねえ。でもこの国には解呪できる人は居ないと思うよ。それと魔王退治に協力するような強者も知らないなあ」

「……………」

ガインが肩を落とし、そんなガインの背中を励ますようにレイが叩く。

ミイナが唸り、頬杖についてレイに視線を向けた。

「どうするの？ とりあえず世界の中心に向かってみる？」

「いきなりは危険だよ」

「じゃあどうするの？」

「それは……他国を巡って情報収集と仲間集めをするしかないね」
「ええー？」

唇を尖らせて、ミイナが不満げな声を出す。と、その時――。

「あ、そうだあ」

シートがパンツと手を叩き、巨体を揺らして部屋の隅にある棚に向かう。

「なに？ どうしたの？」

訝しげなミイナ達に、シートは一冊の本を棚から取り出して見せた。

「こんなのがあるけど、役に立つかなあ？」

「本？」

「伝説の勇者が残した本らしいよう」

「え！？」

ミイナ、レイ、ガインが目を見開く。

「勇者の本！？」

悲鳴のような声を上げるミイナに、シートは頷いて本を渡した。

「うちに代々伝わってる代物なんだけど、でも何が書いてあるか分からないんだよ」

本を受け取ったミイナが中をペラペラと捲り――眉を寄せる。

「これって古代文字かな？」

本には何かが書かれているのだが、その文字は現在使われている文字ではない。ガインも本を覗き込んで唸る。

「読めないな」

「こんな読めない本渡されたって――」

文句を言いつつ本を閉じたミイナ。そのミイナの手から、レイが本を取り上げた。

「レイ？」

レイは表紙に書かれている文字を、指でなぞる。

「魔王……攻……日、上」

ミイナは大きく口を開けて驚いた。

「え？ 読めるの！？ 何が書いてあるの！？」

「待って、僕もそれほど詳しいわけではないんだ。えーと、確か辞書を持ってきていた筈……」

レイは立ち上がり、荷物の中から古い辞書を引っ張り出す。それから本の表紙と辞書に書かれている文字を何度か見比べて、ようやく「分かった」と呟いた。

「何？ なんて書いてあるの？」

固唾を呑んで見守る仲間に、レイは真剣な表情で告げた。

「『魔王攻略日記・上巻』だ」

ミイナ達が固まる。

「……は？ 攻略日記？」

「うん」

ミイナ達は顔を見合わせ、わつとレイに詰め寄った。

「攻略って、じゃあ魔王を倒す方法が書いてあるの！？」

「どうすればいいのだ？」

「うわぁ、大変なお宝だったんだねえ」

レイが慌てる。

「ちょ、ちよつと待って、解説してみるから」

テーブルの上の皿を退け、レイは本と辞書を置き、一ページ目を開いた。そして辞書で調べながら、時間を掛けてゆっくりと書いてある文章を読んでいく。

「私は今日、魔王退治の旅に出た。魔王は強い。そして魔王の城は世界の中心の孤島にあり、周りを険しい山と『膜』に囲まれている、

容易に入ることが出来ない。そこで私は『聖なる存在』の力を借りることにした」

ミイナが首を傾げてレイに訊いた。

「『膜』って何？」

「さあ……」

レイが首を傾げる。

「『聖なる存在』って何？」

「……『人では無い者』と書いてある」

「じゃあ魔物？」

「分からない。とりあえず続きを読むよ」

「うん」

「聖なる存在に会うためには、世界に散らばる『聖なる欠片』を集めなければならない。その一つがあるとされる『緑繁る洞窟』に私は向かった」

そこでレイは顔を上げて、みんなの顔を見回した。

「……どう思う？」

ミイナが即答する。

「よく分かんない」

「同じくう」

シータが同意する。

レイはトントンと指で本を叩き、眉を寄せた。

「勇者が魔王を倒すために、聖なる存在とやらの力を借りようとしていたことは分かるね？」

「うん。まあ何となく。聖なる存在は何かわかんないけど、その力を借りれば魔王は倒せるのかな？」

レイが髪をかきあげて唸る。

「まず、その聖なる存在が今も存在しているかが分からないし、緑

繁る洞窟に今現在欠片があるのかも分からないな。それに——ちょっと気になるのは、この文字は勇者が活躍していた時代よりもっと古い時代の文字なんだ。何故勇者はそんな古い時代の文字を使っているのだろうか？」

「……………」

勇者の子孫達は顔を顰めて、じつと攻略日記を見つめた。

暫く無言で見つめ——ガインがふと気付き、シータに訊く。

「これは上巻となっているが、では下巻も存在するのか？」

「うちにあつたのはこれだけだよ」

ミイナがレイを指で突いた。

「ねえ、緑繁る洞窟って何処にあるの？」

レイが攻略日記に視線を移す。

「えーと、洞窟は世界の東……」

ミイナが怒鳴る。

「東って何処よ！ 広すぎるわよ！」

「待って、ミイナ。ブダイ国から東に三十ロウド行った場所にあるらしい」

「ブダイ国って何処？」

「聞いたことがないな。地図を——」

荷物から地図を取り出し調べようとするレイを、シータが制した。

「レイ、ブダイ国って、ホーダイ国の大昔の国名だよ」

「そうなのかい？」

ガインが顎に指を当てる。

「ここから三十ロウドか、結構近いな。一度行ってみてはどうだろうか？」

五十ロウドが馬車で約半日。洞窟までは、それ程遠い距離ではない。

レイとミイナが頷く。

「そうだね」

「他に手がかりも無いしね」

シータが拳を振り上げた。

「よし、美味しいものの探しの旅に出発だあ」

「シータ、違うでしょ!？」

勇者の子孫達は、伝説の勇者の遺品『魔王攻略日記・上巻』を手に入れた。

10 意外な特技

勇者の子孫達はホーダイ国から東へと進み、緑繁る洞窟へと向かっていった。

馬車の前に魔物——巨大な蝶が現れた。レイが魔法を唱える。

「ツラララ！……うげ！」

氷柱が魔物に降り注ぎ、レイが吐血する。

「カンチ！」

すぐさまミイナが回復魔法を唱え、ガインが自分の意思とは関係なく魔物の前に飛び出した。

ガインは魔物をメツタ刺しにするが、同じくらいやられてもいる。レイが息も絶え絶えにガインに忠告した。

「それは『カン蝶』だ！ 太い指でカンチョーしてくるから気をつけるんだ！」

ミイナがガインに回復魔法を唱える。

「カンチダ！」

そんな中、シータは「頑張れえ」と呟きながら、荷物の中から饅頭を取り出した。

ミイナが思わずそのシータの頭を杖で叩く。

「少しは戦え！」

シータが頭を押さえて振り向いた。

「そんなこと言われても、おいらは大食いチャンピオンだから食べることしか出来ないよう！」

「元は格闘家でしょう！？」

「こんなに太ったら、体なんてもう動かないから無理い」

「……………」

思った以上に役にも立たないシートに、ミイナの頬が引きつる。

「馬車の中は狭くなつたし、戦闘にも参加しない。おまけにその間延びした口調は何？ イラっとするんだけど！」

「口調は仕方ないじゃないかあ」

ミイナは戦闘を終えて馬車に戻ってくるガインと吐血で汚れた床を拭くレイを指差した。

「みんな血塗れで頑張ってるじゃない！ シータもちよつとは血塗れになってみなさいよ！」

「そんなの嫌だよ」

なおもシートに食い下がろうとするミイナを、レイがやんわりと止める。

「ミイナ、昼食にしよう」

「……………」

レイに促されて、渋々ミイナは馬車から降りた。

ガインが周辺から集めてきた枯れ枝に、レイが火をつける。

「キョウカ」

杖の先から出た強めの火が枯れ枝に移り、レイはコホコホと咳をした。

「カンチ」

「ありがとう。でもこれくらいの魔法なら回復がなくても大丈夫だよ」

「そんなこと言って、倒れても知らないよ」

まだ不機嫌なミイナの頭をレイが撫でる。そしていつものように、ガインが肉を焼き始め、レイがスープを作り出す。

「また焼いた魔物の肉と薄いスープ？」

眉を寄せるミイナに苦笑するレイ。とその時、ミイナの背後からも不満の声が上がった。

「ええ！？ 焼いた肉とスープだけ？ しかもそんな量じゃ、おい
ら足りないよう！」

ミイナが後ろを振り向く。

「戦闘に参加しないシータが、なんでそんな文句言うのよ！」

「だってえ」

「うちは貧乏なんだから——」

そこでふと、ミイナはあることを思い出した。シータは大食い大会で優勝した時、確かホーダイ国の王様から賞金を貰っていた筈だ。ミイナがシータの胸倉を掴む。

「シータ、昨日の大吃い大会の優勝賞金はどうしたの？」

シータが首を傾げた。

「賞金？ ちょっと早いけど出産祝いとして妹にあげたよう」

「……………」

ミイナがシータから手を離して頂垂れる。賞金があれば、これらの旅の資金になったのに。

しかしこればかりは仕方が無い。ミイナは力なく地べたに座る。

ガインがそのミイナの前に、焼けた肉を置いた。

「ホーダイ国は天国だったな」

思わず呟いたその時——。

「なにすんのよ！」

ミイナの横からシータが手を伸ばし、肉を奪っていった。

「ちよつと、私の肉よ！」

美味しくなくても取られれば腹が立つ。しかしシータは憤るミイナをよそに、肉を一口齧った。

「………… 美味しくないよう」

顔を顰めるシートタから肉を奪い返す。

「仕方が無いでしょう!？」

そして怒りのままに肉に噛り付こうとしたミイナを、シートタが止めた。

「うーん、ちよつと待っててえ」

「え? なによ」

訝しげなミイナに背を向け、シートタは巨体を揺らして馬車に戻り、大きな袋を持って帰って来た。

「よいしょ」

息を切らせながらシートタが袋から取り出したのは――。

「これって……」

ミイナと、そして二人のやり取りを見ていたガインとレイも目をパチパチとさせて驚く。袋から出てきたのは、調理道具一式だった。すぐに美味しいご飯を作るからねえ」

シートタはガインから肉を貰い、レイから作りかけのスープも引き継ぐ。

「えーと、このお肉に合うソースはあ……」

鼻歌まじりに手際よく料理を作っていくシートタは、最後にふわふわのパンケーキまで付けて呆然とするミイナ達の前に置いた。

「はい、どうぞお。食べて」

笑顔で言われて、ミイナは皿に盛られた良い香りのする肉を一切れ口に入れる。そして次の瞬間、目を見開いて叫んだ。

「美味しい! なんで!？」

材料は同じなのに、味も食感も格段に良くなっている。信じられないという感じで目を見開くミイナに、シートタは照れながら言った。

「おいら、美味しいものが好きだから自分でも料理するんだ」
ガインとレイも料理を口にして、思わず唸った。

「美味しいな」

「美味しい」

ミイナがシータの肩を叩く。

「素晴らしい！ まさかの才能で、急激にパーティーのレベルが上がった気がするよ。これで戦ってくれたらもったいいんだけど」

「そこは期待しないでよう」

「うーん、残念」

ミイナがパンケーキを口に入れる。

お荷物と思われたシータの意外な特技で、パーティーの食事の問題が解決した。

11 緑繁る洞窟

「ホーダイから三十ロウドっていうと、だいたいこちら辺だと思うけど……」

レイが眉を寄せて言う。

「じゃあ、降りてみようか」

勇者の子孫達は、ホーダイから三十ロウドらしき場所で馬車から降りた。

「で、何処？」

見上げてくるミイナに、レイは首を傾げる。

「何処と言われても、うーん、『緑繁る』って言うくらいだから緑が繁っているところなんだろうけど……。攻略日記には具体的な場所までは書いてなかったんだ」

頼りない回答に、ミイナが頬を膨らませた。

「もう！ じゃあシート、こちら辺に来たことはないの？ 洞窟の噂を聞いたことがあるとかない？」

「ないよう。だいたいこんな場所までホーダイの国民は来ないよう」

「……………」

益々頬を膨らませたミイナの頭をレイがぼんぼんと叩く。

「仕方ないよ。こちら辺を探してみよう」

「うーん、まあそうだね」

勇者の子孫達は、周辺を探索しながら進んだ。そして一時間後――

「あそこじゃないか？」

ガインの言葉に、少し離れた場所に居たミイナ達が集まる。

「あー！」

ミイナが思わず声を上げた。ガインが指差す場所は、周囲に比べてあきらかに緑が繁っている。

「不自然なくらい緑いっぱいだよ、きつとそうだ。行こう!」

勇者の子孫達はレイの体力を考慮して、馬車に乗って少し先にある緑が繁っている場所に移動した。そしてミイナが首を傾げる。

「……ここって洞窟?」

植物がびっしり生えていて、洞窟なのかどうか分からない。レイが小さく唸って杖を掲げた。

「とりあえず燃やしてみようか。モウカ!」

呪文を唱えると大きな火球が現れて植物を燃やしていき、レイが吐血する。

「カンチ」

ミイナが回復魔法を唱え、そして――。

「ああ、洞窟だねえ」

洞窟の入り口が現れ、シータが緊張感のない口調で言う。ミイナはホッと息を吐いた。

「やっと見つかった。じゃあ行こうよ。ヒヒリーヌは待っててね」

入り口に馬車を残し、勇者の子孫達は洞窟内へと入っていく。洞窟内はまるで昼間のように明るく、木や蔦などの植物が沢山生えていた。

ガインが壁を触って眉を寄せる。

「妙に明るいな。この岩が光っているのか?」

レイも同じように岩肌を触り、小さく唸る。

「光る岩なんて始めて見た。特に害はなさそうだけど、この先もし危険を感じたら、すぐ外に出よう」

レイの言葉に皆が頷く。

勇者の子孫達はガインを先頭にして、邪魔な植物はレイが燃やし、洞窟内をゆっくり進んだ。

入り口から少し離れた場所まで来た時、ミイナが斜め後ろを歩くシートに話しかける。

「少し下ってるよね」

「んー、そうだねえ。下り坂になってるねえ。地下深いところまで行かなきゃいけないとかだったらいやだなあ」

「ええ？ やめてよ。なんだかも帰りたい——」

文句を言いつつ振り向いたミイナは、そこで「ん？」と眉を寄せ、立ち止まり、地面を凝視した。ミイナの様子に異変を感じたシートと前を歩いていたガインとレイも立ち止まる。

「どうしたんだい、ミイナ？」

「レイ、植物が……」

ミイナの視線を追って地面を見たレイが目を見開く。

「これは……」

地面から植物の新芽が次々と出て、みるみる成長していく。

「凄いねえ。なんでこんなに成長が早いんだろう？」

「シート、のんきなことを言っている場合ではない。ミイナ、俺の後ろに」

ガインが短剣の柄を握って一歩踏み出す。そこに――。

「——きゃあ！」

急激に成長をした植物が枝を伸ばして、ミイナの足に巻きついた。ガインが短剣を抜き、植物に斬りかかる。しかし植物は急激に成長し、ミイナを洞窟の天井まで吊り上げた。

レイが呪文を唱える。

「カマイタチ！ うげえ！」

杖の先から現れた風の刃はミイナの足を掴む枝を切り裂き、落ちてきたミイナを戦士が受け止める。

衝撃に顔を歪めながらミイナは戦士にしがみつき、引きつった顔で斬られてもなお成長し続ける植物を見つめた。

「な、なにこの植物。危険だよ。——カンチダ」

蹲っていたレイが立ち上がり、口元の血を袖で拭う。

「いったん戻って対策を練ろう。モウカ！ げほ！」

「カンチ」

炎が植物を焼く。が、勇者の子孫達は次の瞬間驚いた。先程よりもあきらかに早いスピードで、新芽が出て大きく成長していく。

「レイ、移動魔法で外に出ようよ」

ミイナがガインの腕からおりて、レイの袖を引く。しかしレイは首を横に振った。

「無理だ。移動魔法は屋内では使えないんだ」

ミイナが目を見開いて大きく息を吸った。

「え、そんな、どうするの！？ 私達洞窟に閉じ込められちゃうよ！？」

まさか移動魔法にそんな制約があるなど思いもしなかった。そういう重要なことは先に言っただけだったとショックを受けるミイナ。そのミイナの肩に、ガインが手を置いて提案した。

「レイの魔法で燃やしながら全速力で出口に向かおう」

「全速力？ それはレイには無理じゃない？」

体の弱いレイは走れない。ましてや呪文を唱えながらなどできるわけがない。その通りというようにガインが頷いた。

「だからレイは俺が背負う。その後ろをミイナが走りながら回復魔法、最後にシートだ」

「ええ？ おいら走れるかなあ」

唇を尖らすシートに「頑張れ」と言いながら、ガインがレイに背を向けてしゃがむ。

「ごめん、ガイン」

他に良い方法も思い浮かばないと、申し訳なさそうに背中へはりついたレイの足を、ガインはしっかりと掴み立ち上がった。

「では行こう。レイ」

レイが杖を掲げる。

「モウカ！」

「走れ！」

勇者の子孫達は外に向かって走り出した。

「カンチ！」

「モウカ！」

「カンチ！」

「モウカ！」

攻撃と回復を繰り返し、植物を燃やししながら勇者の子孫達は突き進む。レイの吐いた血が、ガインの後頭部と背中を汚していく。

後ろから荒い息が聞こえ、ミイナは走りながら振り向いた。

「シータ、大丈夫？」

まだ少ししか走っていないというのに、シータは既に遅れていた。

「だ、大丈夫じゃ……」

と、その時、シータが地面から生えてきた植物に躓く。

「うわぁ！」

前のめりにこけたシータに、ミイナが悲鳴を上げた。悲鳴に気付いたガインも立ち止まって振り向く。

「シータ！ 何こけてるのよ！ ほら立って、急いで！」

「う、うん」

シータに駆け寄ったミイナが、シータの腕の贅肉を掴んで何とか立ち上がらせようとする。

「頑張って立って、出られなくなるよ！」

ガインも駆け寄り、片手でレイを背中に固定し、もう片方の手でシータの贅肉を掴んだ。二人に引っ張られ、シータがなんとか起き上がる。

「うん、よいしょう！」

巨体を揺らし、シータはホッと息を吐いた、が。

「あれえ？」

シータの体が、後ろに傾く。

「シータ！」

慌ててミイナとガインが贅肉を強く引く、が、シータの重い体重を支えられるわけもなかった。

「う、うわああああ！」

シータが後ろ向きに、まるで手からうつかりこぼれた饅頭のように、ころころと転がっていく。

「ちょ、シータ！」

「シータ止まれ！」

「シータ！ うげえ」

シータは植物を薙ぎ倒しながら、洞窟の奥へ奥へと転がる。

「待って！」

ミイナ達はシータを追いかけた。

12 割れた茶碗のようなもの

植物を薙ぎ倒しながら、洞窟の奥へ奥へと転がるシート。

「待って！」

ミイナとレイを背負ったガインがシートを追いかけるが、更に加速しながら進むシートになかなか追いつけない。そして――。

「止まったぞ」

突き当たりの壁に衝突し、やっとシートが止まった。

「大丈夫？ カンチ！」

ミイナに回復魔法をかけてもらい、シートが頭を振りながら体を起こす。

「うう、回転しすぎてクラクラするよう」

「シートったら何してんのよ、もう」

文句を言いつつ周囲を見回し、ミイナはガインの背中からおりたレイに視線を移した。

「ねえ、ここってたぶん……」

レイが頷く。

「きつと最深部だね」

「あ、やつぱり？」

洞窟の最深部は意外に広い空間になっていて、そして植物が一本も生えていなかった。レイが顎に手を当てる。

「もしかして聖なる欠片があるかもしれない。探そう」

「聖なる欠片ってどんなのかなあ？」

復活したシートが立ち上がりながら訊き、レイが眉を寄せて答えた。

「えーと、確か『割れた茶碗の欠片みたいなもの』って攻略日記に書いてあった」

「割れた茶碗ん？」

「……なにその表現？」

首を傾げるシータとミイナ。そこに少し離れた場所から声がかかった。

「もしかして、これか？」

ミイナ達の視線が声のしたほうに集まる。ガインが何かを左手に持つて立っていた。

「あ、割れた茶碗の欠片みたいなやつだ」

ミイナは思わず呟いた。手に持っているもの、それはどう見ても割れた茶碗の欠片だった。

「何処にあつたんだい？」

「その台の上に」

ガインの指差す場所には、洞窟には似つかわしくない細かい細工が施された台があつた。レイが台に近付く。

「人工物、だね。祭壇のような感じだけど……それでもこの細工、ガインの短剣の鞘の細工に似ていないかい？」

ミイナが「ええ？」と顔を顰めた。

「ちよつと、まさか呪い系？」

欠片を持ったガインの動きが止まる。また安易に触れて呪われてしまったのだろうか。レイがガインの持つ欠片に顔を近づけて目を眇めた。

「うーん、僕じゃ分からないな。ミイナ、確認してくれないかい？」

「ええー？ 仕方ないなあ」

渋々ガインの元に向かうミイナ。しかしそこでふと、勇者の子孫達は異変に気付いた。

「植物が生えてきてるよう」

それまでこの場所には一本も生えてなかった植物が地面から次々生えてきている。それは驚くほどのスピードで成長し――。

「……なんか、一つに纏まったね」

太い一本の、鋭い牙が生えた大きな口のある木になった。

「植物系の魔物なのか？」

ガインの右手が短剣の柄を握る。

「これは『タベテクリ』だ！ イガ栗をイガごと食べさせてくるから気をつけるんだ！」

レイが叫んだと同時に、ガインが飛び出す。魔物は立派なイガ栗が実った枝をガイン目がけて伸ばした。

「カマイタチ！ う」

「カンチ！」

レイが枝を切り落とし、ミイナが回復魔法を唱える。ガインが木の幹——魔物の胴体をメツタ刺しにするが、短剣では多少の傷が付く程度で、あまり効果はなさそうだ。

「やだ、強い！ どうするの！？」

「戦うしかないよ、モウカ！」

「カンチ！」

火球は魔物を燃やすが、また新しい芽がすぐに生える。

「弱点は火っぽいよね。レイ、もっと凄い火系の魔法を使ってよ！」

「でもガインが……」

「今更多少の火傷を気にしたって仕方ないでしょう？ 回復はするから！」

そう言っても躊躇しているレイにミイナは舌打ちする。そして――

「頑張れえ！」

応援しているだけのシータに、益タイライラが募る。

「シータも戦ってよ！」

ミイナはシータの肩の贅肉を掴んだ。

「え？ 戦えと言われても、無理だよ」

首を横に振るシータ。ミイナは苛立ち紛れに贅肉を引っ張り――そこでハツと思いついた。

「そうだ！ さっきみたいに転がってみればいいじゃない！」

先程シータは、転がりながら植物を薙ぎ倒していった。シータの巨体はそれだけで十分凶器になる。

「ええー？」

「いいから行け！ 勢いよく転がって！」

ミイナがシータを突き飛ばし、更に杖でつつく。

「うわあ、ミイナ、やめてくれよう」

「早くして。ガインとレイが出血多量で死んじゃうよ！」

「うう、分かったよう。せーの！」

シータの太い足が地を蹴り、巨体が転がる。

シータは『大回転』の技を覚えた。

「凄い、シータ！ 行けー！」

迫り来るイガ栗を弾き飛ばし、シータは魔物の本体へと転がっていく。そのままシータは魔物の体に衝突した。

地響きのような音が洞窟内にこだまし、衝突したシータは魔物に弾かれて、なおも転がり続ける。そしてその場で魔物と戦っていたガインは――。

「あ、巻き込まれた」

シータの大回転に巻き込まれたガインが、シータと一緒に転がって魔物から離れる。

ミイナは地面に片膝を付いて荒い息をしているレイに指示を出した。

「今だよレイ。凄い魔法やって！」

レイが目の前の状況に啞然としながらも頷く。

「あ、ああ。――カエンチュウ！」

巨大な炎の柱が現れ、魔物を燃やす。

「クリイイー！ クリイイー！」

魔物は叫び声を上げながら、燃えるイガ栗を猛烈な勢いで投げ始めた。

「きゃあ！ 何すんのよ！」

ミイナが杖でイガ栗を必死に打ち返す。打ち返された魔物は、更に憤ってイガ栗を投げた。

「もう、しつこい！」

ミイナが大きく振りかぶり、渾身の力でイガ栗を打ち返す。燃える栗は低く飛んでいき……。

「あ、引火した」

まだ転がるシートとガインに当たり、二人の服が燃え上がった。

ミイナがしまったと顔を顰め、レイに視線を移す。

「レイ、シートとガインが燃えちゃった——ああ、レイ！ カンチシロ！」

強力な魔法を使ったレイは、虫の息で地面に倒れていた。

「しつかりして、レイ」

ミイナがレイの腕を掴んで起き上がらせている間に、炎を上げて高速回転するシートとガインが魔物に突っ込んでいく。

「ク、クリリリイイー！！」

ドーンという衝撃音と共に、魔物が薙ぎ倒された。

「……え？ 倒した？」

ミイナが目を見開き、死の淵から蘇ったレイがよろめきながら立ち上がる。

「倒したみたいだね。モウウ！ うげ」

レイが魔法を唱えると雨が降り、シートとガインの炎が消える。
「カンチシロ！」

ミイナがシートとガイン、レイにも回復魔法をかけた。

「うー……、酷いよミイナあ」

のろろと体を起こしたシートとガインにミイナが謝る。

「ごめんね」

「ごめん」

レイも一緒に謝った。ガインが眉を寄せる。

「服が燃えたな」

シートもガインも、すっかり全裸になっていた。ミイナがえへへと笑う。

「えーと、でもなかなかいい体してるよ、ガイン」

「……ありがとう」

「あ、ところで聖なる欠片は？」

ガインが左手を持ち上げる。戦闘中も回転中も離さず、聖なる欠片はガインがしっかりと握っていたようだ。

「ミイナ、確認できるかい？」

レイの言葉にミイナが頷く。

「うん、じゃあ見せて」

ミイナは右手で股間を隠すガインの元に行き、聖なる欠片をじっと見つめて唸る。

「うーん、何か魔力のようなものを感じるけど、まがまがしい感じはないよ」

「じゃあ呪われてはいないのかい？」

「たぶん大丈夫」

ホッと胸を撫で下ろすガイン。レイが微笑んだ。

「良かった。聖なる欠片が攻略日記に書かれた場所に今も存在すること分かったし、それを手に入れることもできた。……帰ろうか」

ガインが頷き、ミイナがこちらに背中を向けてごそごそと動いているシータに声をかける。

「シータ、何してんの？ 行くよ」

「待って、その前に焼き栗を拾うから」

「焼き栗？」

ミイナ達が周りを見回すと、先程魔物が投げていたイガ栗が、レイの魔法でこんがりと焼けていた。

「あ、美味しそう。拾ってから帰ろう」

勇者の子孫達は焼き栗を拾い、最深部の部屋から出る。

「あれ？ 植物がなくなってるよ？」

ミイナが首を傾げた。あれほど繁っていた植物が、一本も見当たらなくなっていた。

「親玉がいなくなつて撤退したのかな？ これで帰りは安全だね」

レイが胸を撫で下ろす。ミイナの隣にいたガインが、後ろに一歩体を引いた。

「ミイナとレイは先に歩いてくれ。俺達は後ろを行く」

「うん」

両手いっぱい焼き栗を抱えたシータが注意する。

「ミイナ、振り向かないでよう」

「振り向かないわよ！」

シータの裸なんて見たくないよ、とブツブツ言いながら、ミイナは歩いていく。その後を、レイとガインとシータが続いた。

勇者の子孫達は、一つ目の聖なる欠片を手に入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6928x/>

S.M.T.クエスト

2011年12月2日23時51分発行